

特別企画 多田孝志×細川英雄 公開対談

「教育実践における『対話』とは何か」

発題要旨

問い続けたい「深みのある人生」とは

多田 孝志

教育実践における「対話」について、細川先生との対談で話題にしたかった事項をまとめてみました。

○ 国際理解とは、

世界各地を旅してきた。その長い旅の途上で多くの人々と巡り合い啓発されてきた。熱砂の国クウェートでは、アラブの若者たちに柔道を指導し、共に汗を流し、いくたびも感動を共有した。カナダの高校に赴任し、生活し、多文化共生社会に生きる人々の智慧を知った。ケニアでは、ストリートチルドレンの自立を支援し続ける日本人女性や、民族の誇りの伝承を使命とし、学校づくりに献身するマサイの若者と対話してきた。

国際性とかグローバル意識とは、流れるような外国語の能力や煌びやかな学芸の才気や事業のスケールの大きさではない。その要諦は、ものごとの本質を洞察し、他者の思いや心情を感じ取れる「深さ」であるように思えてならない。

○ 学問とは、

「学問的知識」は、「知性の傲慢」を克服すべきである。

学問研究の進展が形骸化を生む悲劇を打破する方途は何か。

○ 人間関係

人と人が出会うということは、限りない不思議さを秘めている。偶然が人との出会いをもたらす。その偶然に何の意味を見出だすかで、世界は大きく違って見えてくる。その橋渡しをするにが対話ではないだろうか。

○ いま思うこと

いつのころからか、自分の生きる場所を発見したと思えた。多くの教育実践の場に参加し、教職員のみなさんと語り合ってきた。そこから得られるものは、学問といえるような代物ではなく、きっちり体系化はできないけれども、そこには私を夢中にさせる真実があり、陶酔させるものがあった。

学問の世界からはみ出したかもしれないが、現実と学問の間にある、不思議な、そして感動に満ちた領域へ入っていったことを実感していた。そして、そこで出あえた真実は、「教育の真実は、事実として学習者を成長させることにある」との信念を形成させてくれた。

学生達との語り合いも私を魅了している。必ずしも理路整然していない、混沌・混乱をとまなう時空、しかし、彼らとの対話の世界は、私の精神世界を強引に広げてくれる快感と、真摯・純な心に触れるしみ入るような喜びをもたらしてくれている。

この時空こそ、私がいつまでの浸っていたい世界だと思わせる魅力に満ちている。

問い続けたい「深みのある人生」とは

実践と研究——私の精神世界の充実へ

細川 英雄

教育実践における対話というテーマで、多田さんと対話をすることになりました。多田さんの提案を受けて、考えたことをまとめてみます。

○ 出会いと対話から実践研究へ

多田さんの国際理解は、さまざまな出会いとそれぞれの対話を通して形成された人間関係の豊かさだろうと思います。私の場合は、世界各地への旅の経験はそれほど多くないので、むしろ自分自身の教室でのさまざまな実践のなかで生まれた出会いと対話が、私の「実践研究」という考え方の形成に意味があると考えています。

○ 実践＝研究という立場

もともとあまり人間には興味がなかった（人とのつきあいや関係が苦手だった）ので、就職活動もせず、いつの間にかモラトリアム的に研究職についてしまった私が、教育実践の意味について目覚めるのは、実際に教員養成課程の教師になってからです（細川，2012）。教師という職業が生活として意味のあることだということを実感するために、自分の教育活動をどのように活性化させようかと考えはじめたのがそのきっかけです。その中で、対話の重要性を発見し、そこから、その対話自体を公開・公表することで自分の実践の意味を考えようとなりました。このことが実践の公開ということに結びつきます。

○ 実践の公開の意味

自分の教育実践を公開しはじめると、次から次へとアイデアがわいてきて、さらにそれを公表するという循環が生まれました。毎日のクラスが楽しくなり、それを記述する作業も喜びにあふれたものになります。その実践の内実を公開すること自体が、報告になり論文になり、さらに本になるわけですから、こんなにうれしいことはありません。私の「実践＝研究」という考え方の原点は、ここにあります。ここでの実践は、「何かを教える」というよりも、「一緒に考える」という行為に近いです。その一緒に考えるという行為のプロセスそのものが楽しい、というか知的な興味・関心を刺激するということです。一方、研究は、そうしたプロセスを記述するということなので、今度はその同時性をメタ的に見るという興奮があり、その記述の過程で、今度は自分自身との対話が発生します。

○ 「私」をくぐらせる問題意識から

多田さんの指摘する「学問的知識」が「知性の傲慢」を生み、「学問研究の進展が形骸化を生む」のは、学問対象を固定化・静態化させ、その発見の原理を他者にまで

敷衍化し、一般化させようとする姿勢にあるのでしょうか。そこには、客観性・絶対性への信仰があるため、不安定な「私」をくぐらせる問題意識が生じません。

「学問研究の進展が形骸化を生む悲劇を打破する方途」は、「私」の持つイメージを意識化し、それを払拭・更新しつづけるという、その動態性のなかでの対話と議論の持続的な場の形成しかないと私は考えます。

実践研究には、絶対的な立場もなければ、それを実現する最善の方法も存在しないでしょう。他者および自己との対話の連続のなかで、「人間とは何か」を問い続けること、このような生き方が、私にとっての「深みのある人生」です。

参考文献

細川英雄（2012）. 『研究活動デザイン——出会いと対話は何を変えるか』 東京図書.